川柳

「露草の花」

泉谷　てい女

そそと咲く露草の花母偲ぶ

花鋏逝く夏惜しみ秋を切る

傘になり杖にもなって逝った姉

ご無沙汰もついでに詫びて納骨す

この命弥陀に委ねて年齢かさね

川柳

「おらが村」

岩田　しげみ

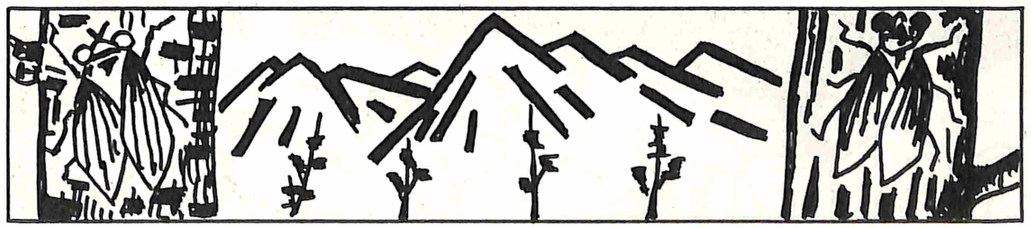
無精卵ばかり食うから人が減る

電話より噂が早い過疎に住む

胸に手を置いて仏の夢を見る

干菜揺れ住いの広さおらが村

安楽死願い今夜もまた眠る



川柳

「おまえもか」

高橋　けん一

父の靴ぽこぽこ温くい声を出す

父と子に沼ひとつある煙草盆

「帰って来い」父の手紙は短くて

おまえもか溺れた川で亡父に逢う

父を描くやっぱり背中だけになる

川柳

「気晴らし」

白川　哲子

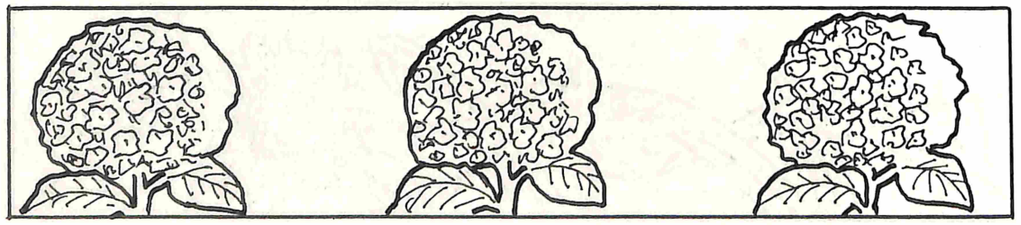
ジャンプしてK点越えた日のスリル

負け通し恋だけ一つもぎ取った

気晴らしに天狗の鼻を欠いてくる

しみじみと新茶味わう二人です

次の世も馬鹿正直に生きるらし



川柳

人生

瀬川新一

人生に止り木欲しい齢となり

フキのトウ　雪の窓開いてこんにちは

福寿草　チュウリップと丈くらべ

空高く白鳥鳴いて飛んで行く

鳴きながら白鳥隊組み北帰行

川柳

月見草

小山内　トモ子

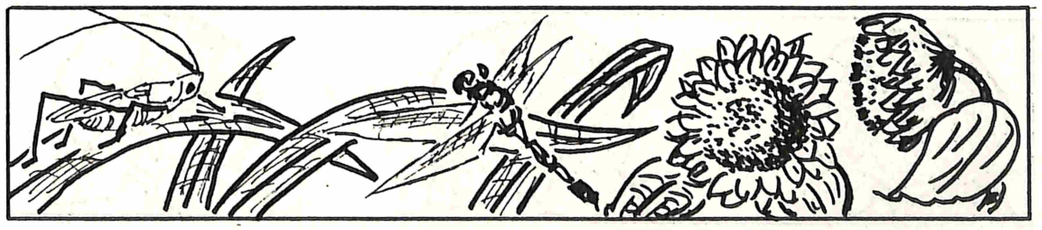
休日は　犬に連れられ　散歩する

しとしとと　ささやくやうな　春の雨

タクワンの匂い気になる　バスの中

月見草　未練残して　朝になり

子や孫の　自まん話のクラス会



詩

春、そして秋

木村悠衣

外は徐々に　明るさを増し
花の蕾が新しい風に
揺らいでいる

ミントの香りが　ほのかに優しく
私のまつ毛を掠める
暖かな枯れた黄色の紅葉の表面に
軽く
目を閉じ、心を委ねる。

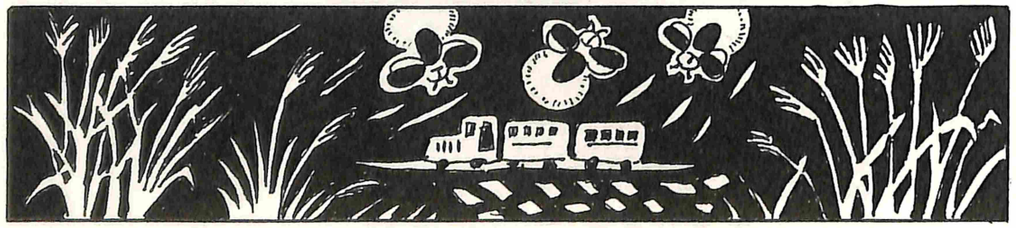
詩

残された光

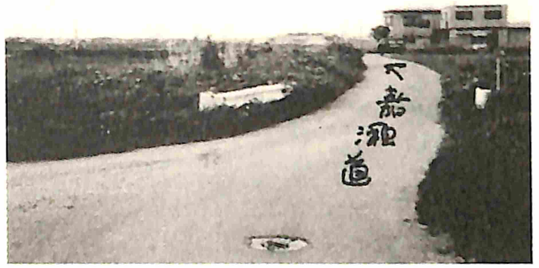
木村悠衣

穏やかな夜
灰色の空に一つ　ぽつんと
やわらかい光を纏い
雲をぼかす

静かなバラードを奏でるかのように
その月の場所では
居心地が良く
私は目を逸らすことができなくなった
その月に全てを奪われて
しまいそうだった。



①歴史散策
金木散歩
消える古道



朝日橋を渡って左に折れて玉水・菅原の水田に至る道路は、長富―嘉瀬―金木間に新道（県道）ができる以前は、喜良市・嘉瀬に至る主要道であった。

私達の住む金木町は、藩政以前浪岡から中山山脈山根沿い十三に至る下の切道が主要道であって、金木・嘉瀬は脇道によって結ばれていた。

天正六年（西一五七八年）大浦為信浪岡城を攻略、北畑顕村自刀するとともに飯詰朝日氏も亡び、天正十八年（西一五九〇年）大浦為信津軽および外ケ浜一円所領安堵され、飯詰村に津軽藩統治の代官所が置かれ、下の功遺通り集落の経済の中心地に飯詰村が位置されていた。

大川（岩木川）築堤、各河川の整備に伴って、津軽四代藩主信政時代、葦茅地地帯の新田開発も進みも貞享四年（西一

古道分岐点

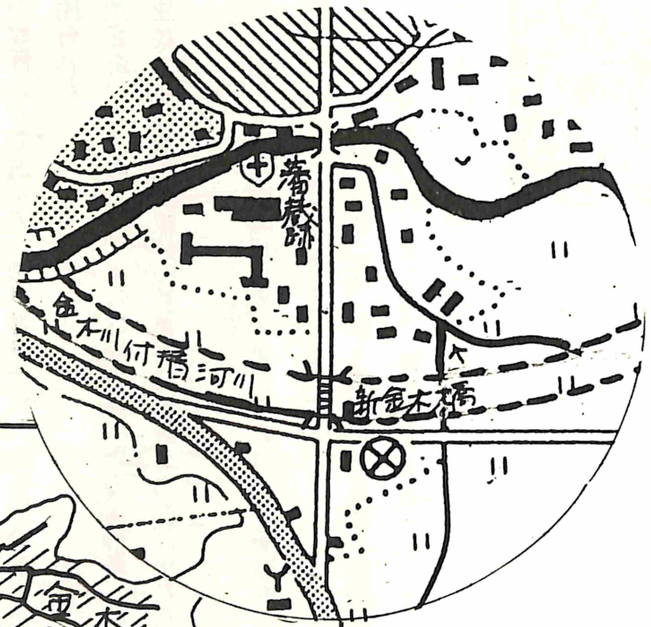
六八七年）下の功遺は、飯詰組と金木組に分けられ、金木村に代官所が置かれ、下岩崎以北の三十六ケ村が管理下に入った。

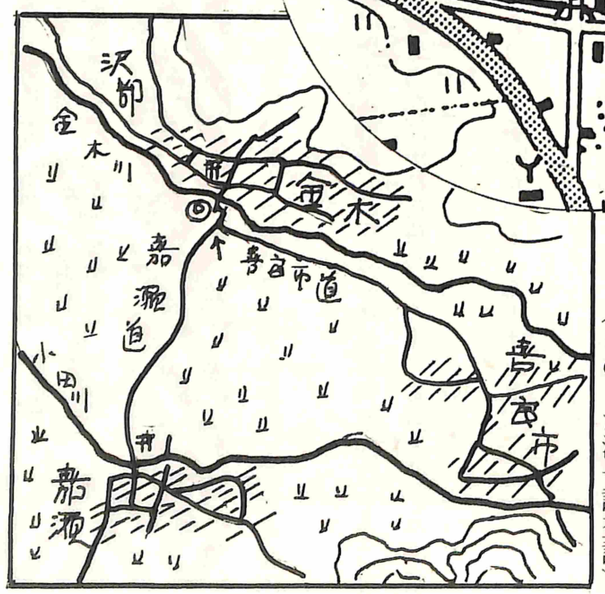
同四年（西一六九一年）金木村に御蔵（現金木病院敷地内）が設けられると共に、管理下の三十六ケ村の貢米（上納米）が納められ、村をむすぶ道が開かれた。

経済圏が飯詰から金木に変わった結果、中柏木・小栗崎・嘉瀬・小田川・野崎・喜良市地域の上納米及び檀那（地主）に納める小作米は、嘉瀬道・喜良市道を通って、大八車・荷駄で運ばれた主要道であった。従って浪岡を基点とした中山山脈山根沿いの下の切道は廃たれた。

廃藩後明治以降に入って、各地方の道路も整備され、喜良市から岩見町を経て、金木町に入る新道、嘉瀬畑中より東舘跡畑を切割り金木朝日橋に至る県道が新設されて、本当該の古道は金木町農民の水田耕作のための農道の形態となった。

小田川ダム完成に伴って、昭和五十三年金木北部・中部・南部地区水田圃場整備が着手され、水田区画整備の結果、本道のほとんどの道路は滅せられ、また現在進められている金木川河川付替工事によって本道路が分断され、嘉瀬道と喜良市道の分岐点栄町と、嘉瀬西舘八幡宮西側の畑の中に位置する道路に、その道路の形態をとどめているに過ぎない。





私達の祖先が歩いて来た道、往時物資の運搬、村々の発展に寄与して来た道、その道の姿が、金木町から消え去ろうとしているとき、その道に立って感無量のものがあった。でき得ればここに古道があったと標識を設置しておくべきであろうと痛感された。

（きのした清一調査記）

俺ァ村コの絆／小田川の流れ

俺ァわらしコの頃、嘉瀬の北の端れコ畑中の奴橋近くで遊んでいると他村の人・あるいは旅人と思われる方々から、嘉瀬と金木の間の川コはこの川でしょうかと、しばしば問われた。

盛夏ともなると小田川のせせらぎに手足や顔を洗って立ちさる。当時は橋の袂の坂道を馬車ごと川底に降り砂利を採取することもできました。小田川に伝わる嘉瀬奴踊りと歌詞は津軽藩主信政公の新田開発に最も力を注がれた時の村人達の苦労と悲しみの状態を顕わした盆踊りとされている。

世は元禄（西1687～1700年）である。まさに、都の人々は開闢以来の景気に浮き立ち、奢りたかぶったとされる。

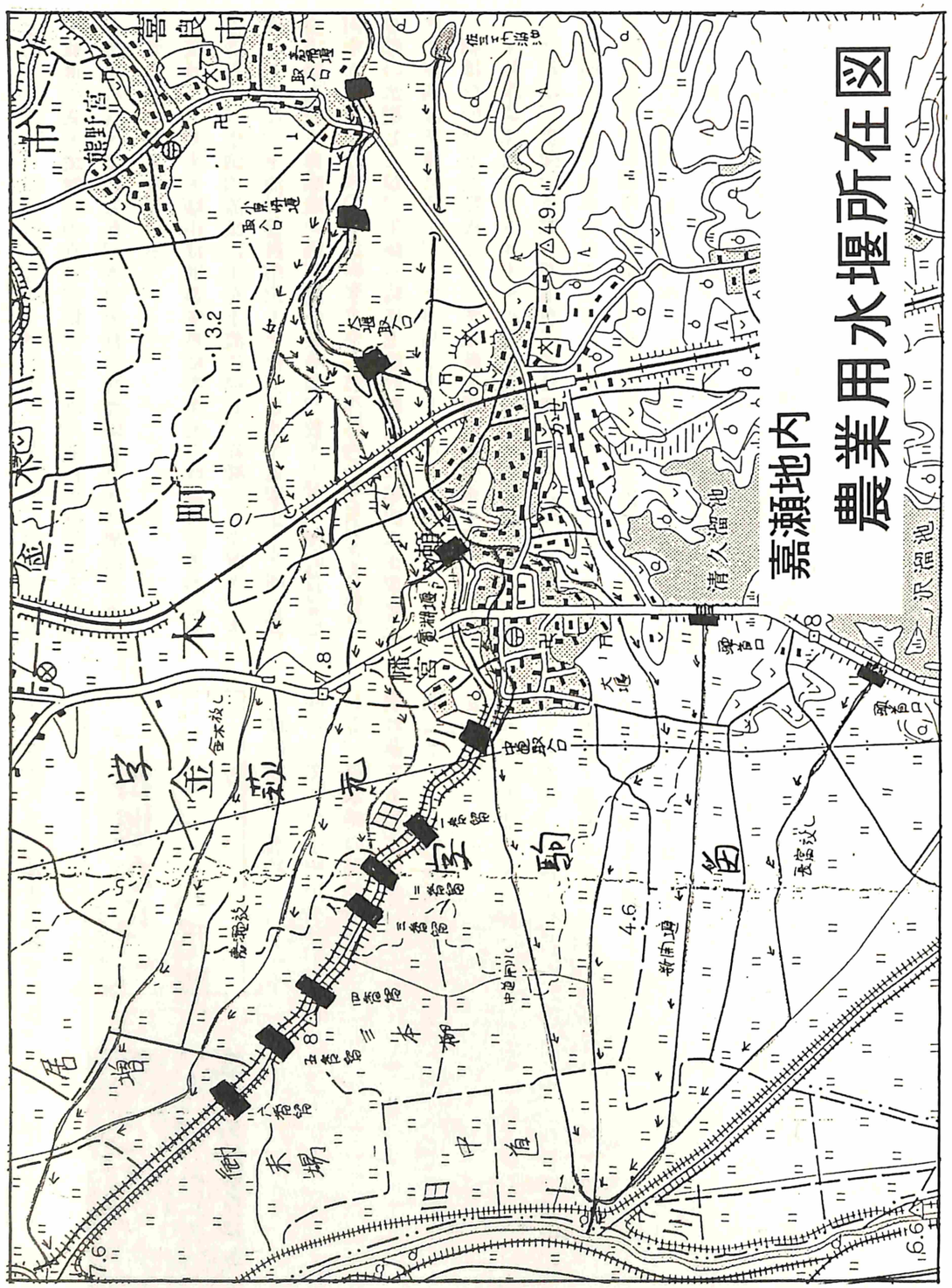
〝今の世のなかはさかさまで、嘉瀬と金木の間の川コ、石コ流れて木の葉コ沈む〟

奴踊りの由来は、幾つかの流伝があり、詳しくは「かたりべ第二集、第九集、第十五集を参照のこと」又小田川（昔は通称＝間の川コ）の流れは、村の俗説によると、現在の小田川が本流となるまでは、幾筋もの流れがあったとされる。初代藩主為信より除々に新田開発に着手され、自然に任せ放しの流れを人工的に、小田川を本流になされたとの説がある。

嘉瀬地区の主要堰

昭和四十五年～五十一年までの六年間の工期と十五億円の事業費をもって、小田川ダム完成する。それ以前は小田川流域に、嘉瀬地区田んぼに水を引き入れる堰止頭首口は十ケ所あった。

この堰止は毎年、雪解け水に多少は破壊されて修復するために受益者の多く有る堰止では百人以上の人が出て俵に土を入れる者、馬車で土を運搬するやらで小田川沿いの春の賑わいが始



まる。

修理のあとで堰口の高さ、幅、田んぼに流れて行く注入口等が規格に合っているか、水の流れの度合いを下流の堰頭に確認してもらい許可を受ける。

又コンクリート堰止に改造するにも下流の堰頭の許可が必要とされた。小田川流域に水を下流に巡し、嘉瀬の人を置き、夜明けと共に、上流の喜良市田モデに引き水する堰止二ケ所と喜良市橋上流ー嘉瀬堰・橋下流小栗崎堰、数メートル程の長さに何十センチかの巾の水止板を下し上萩元地区に水を引き入れる。嘉瀬の水廻し人が、午後三時に上流の堰止より順次水止板を上げて夜間は下流に流す。

（朝は夜明けと共に板を下して上萩元地区に引水す。）

津軽鉄道二百メートル上流に現在も使用中の大堰がある。水の流れは、嘉瀬の北側の部落を、通り抜けると各地区の田んぼの面積に応じた水が流れるように足盤が設置されていても水の最使用期及び日照りとなると個人別の末端まで足盤を設けるが、自分田に水の諺の如く、水争いの絶えない地域でもあった。下流で田植えをしていると必ずその日のうちに水を流してやるというならわしもあった。

嘉瀬バイパスより下流の小田川に設けてある六ヶ所の堰は一番堰～六番堰と称していた。

嘉瀬堰・小栗崎堰・サンザム堰・三番堰は小田川の北側の上萩元地区及萩元地区・通称コジャキ・タデコ・ヤマコ・土堤端・エマシ・へと引き水されていた。

一番堰から六番堰

津軽鉄道下流約二百メートル地点はサンザム堰これまで西に向かっていた小田川の流れが急カーブとなって南向に流れが変わる、洪水時の渦巻で堰下の土堤は崩壊され西側の小丘田畑も崩れ落ちて碧水の深い淵となって別名魔淵堰とよばれ十ケ所の堰でもっとも危険場所とされ周囲に近寄る可からずと立て札もあった。

各堰の下は大人の背丈もとどかない深みがあり蟹や雑魚の住かでもある。一番・二番・四番・五番・六番堰は小田川南側駒留地区・通称オシエバ・トラバタ・三木柳・カナヤヂ・カシモの田んぼに水を引き入れていた。

終点の六番堰は水使用期間になると雨の降らないかぎり一滴の水も届かない。小田川終点の南側・リンゴ畑の跡地約五町歩は旧嘉瀬地区一番の地主山勝所有地であり昭和二十五年前にセメントによる堰を造り又下流の十川に水揚げポンプを設けて開田されたが農地改革により（五十町歩余の水田を所有）村一番の財産家で嘉瀬一等地、元の劇場のある十字路に門と高い黒垣を、巡していたが、農地改革の数年後に宅地は、他人の手に渡

り、家は現在桜田部落の国道三三九号線添いに笠井家として建っている。

溜池掛りの用水

国道三三九号線添いの通称長富溜池及嘉瀬溜池は元禄時代の築造といわれている。

長富溜池は長富地区と嘉瀬地区に分流され鎧石地区と雲雀野地区・嘉瀬溜池も雲雀野地区（通称新開田（シンケエ）嘉瀬田んぼの三分の一ほど）の面積を潤す。この新開地区は日照り続きになっても両溜池により水不足にならずに済む地区であった。

この地区は三分の二ほど湿田があり馬での作業はできなく三本鍬で土を起こし、土を砕き水を入れ一本鍬で泥にして田植えを行う。湿田からの産米は良質と言えなく又、畦道（あぜみち）から刈り取る草（馬の食べる）も他の草よりも味はまずいのか、私の馬も好まなかった。

昭和五十年度からの県営ほ場整備事業により湿田も改良され良質米が生産されている。

二つの溜池の水は新開の田んぼの排水溝に流れ飯詰川終点のサイフオン・飯詰川の川底を横断して、大正初期の開田とされる飯詰川南側・通称耕地整理・雲雀野地区約四十二町歩に利用された。

この地区は足踏も水車で、個人の田に引き水をした。

旧嘉瀬村長地主であった旧宅＝現在笠井家に移築

当時一枚一反の広さの田を田掻き（水入れて土塊を砕く）のできるまでに水を入るため昼は数カ所で水車を使用するため水路の水の量が少なくなるので、夜中に大正六、七年生まれの成田善蔵及木下留蔵の若い頃の二人は（昭和十五年頃）交互に朝まで水車を踏むも乾燥しきった土塊や割目の地盤に浸透する水が多く、一枚の田に七分程の水しか入らない。

私と山中満行の二人が早朝より起こされ二頭の馬を連れて耕地整理の田んぼへと行き一枚の田に水の渡った個所より一頭は縦に一頭は横に交差し合いながら土塊を田植えができるまでに泥にする。

耕地整備（雲雀野）地区は村落より離れること約四キロ、水利の関連もあり田植えは村の最後となり六月十日頃、他村の人々から苗運び馬と稲運びの馬が行き逢うと嗤われていた。

肥料撒き、水車踏み、田掻き、田植えと村の人々が群れ一斉に急作業が始まる地区だった。

近村からは田植えも済み、虫祭りの太鼓の響きが聞こえてくる。もう、ひと息それ頑張れと元気付けられる響きでもあった。

嘉瀬地区の田んぼ面積は約五百六十町歩・現時点と半世紀前と広さではあまり変わりない。

現在は小田川ダム・小田川改修・十川改修・排水機の設備、碁盤の目のよに区画された田んぼは美しい。この美田と区画前の昔の田んぼの風景を想起し、ダブらせながら平成十一年八月六日晴れ（原爆記念日）に奴橋を起点に軽トラに乗って嘉瀬地区田んぼを一周するために小田川の北側の土堤を東に向かって走ると上萩元地区は一面の転作の大豆である。

嘉瀬と喜良市の境界らしき所に来ると約一、二キロと車のメーターが表示される。小田川より農道を北に〇、五キロ走ると野崎より西に向かう舗道にでる。

この舗道を、米ロードまで行き萩元地区と菅原地区の境界農道を西に行き、十川近くまで走ると四キロである。

萩元地区より小田川地区の最下流の橋を渡り、駒留地区（オシエバ）小田川南側終点に着くと二キロであった。小田川終点より十川の土堤を南に走って飯詰川終点雲雀野橋まで二、五キロの距離であった。途中一面に大豆が蒙々と青く繁っていた。

区画整理事業当時は飽くまでも稲コ育てるためにあったが、世の中の変動に（今年の転作は嘉瀬地区の三分の一と言われる）怒りを感じながら車を走らせる。

雲雀野橋より耕地整理地区を一回りすると、三、二キロあった。雲雀野橋より飯詰川北側の土堤を東に進み嘉瀬区画整理の農道に降りて長富溜池の国道三三九号線に出ると三キロである。ここから北に向かって起点の奴橋に着くと二キロあり嘉瀬地区の約五百六十町歩の田んぼを、おおざっぱに一周すると一八・七キロあった。

縄文からの流れ

稗（ヒエ）は北からの文化の要素であり、稲は南からの文化要素があるといわれているが、嘉瀬の稲作の始まりの年代を知る人はいない。田舎館村の水田の垂柳遺跡は約二千年前の弥生時代のものといわれている。日本国は神代からの瑞穂の国と美称す。

我がふるさとも瑞穂の文化を受け継いできたが、瑞穂の美称が薄れていることは確かであり、農家に生まれ農する私には淋しい。

中山山脈からの小田川の流れは先輩・故人等の俗説では、現在の冷水町内通り及び浜田精米所近くの小堰の流れ等と合流され鍛冶町の薬師神社の南側にある大堰が本流の説。又、小田川ダムのサイレン塔のある急カーブの所にあったサンザム堰より引入れた流れこそ小田川本流であり東舘跡の堀を利用した流れとされる。

第二かたりべの嘉瀬史跡の足跡を尋ねるのページによると、嘉瀬東舘跡で天正十五年五月新城白旗城番・阿部孫三郎の金岐舘守・津島金右ェ門の急襲を受け飯詰高楯城幕下の東舘守浜舘三郎永光討死。この地は縄文後期の土器破片出土、古代住居跡とされ、また蝦夷砦跡とも伝えられ、古くから存在が位置付けられている。

現在の嘉瀬八幡宮の森・嘉瀬西舘跡天正十五年五月（西暦一五八七年）新城白旗城番阿部孫三郎・金岐舘守津島金右ェ門の襲撃を受け高楯幕下の西舘守・三浦権十郎重孝・砦に放炎討死し果てている。また平泉藤原時代の蝦夷舘跡と伝えられる。

昔の古戦場跡の畑仕事に、両親に連れられ行くと畑地の中から（約平安末期）の土器の破片が出ると幼年の私に遊びの倶に与えてくれた。

小学生の頃、遊び回って空腹になると畑の、青首大根・人参・瓜等の句物を盗み食べては満腹とする。

畑作りの主婦等が春先から精根を注ぎ育て上げた句物を先取りして食べ、しかも大根は上の青首の方、瓜は下の方を食べてあとは捨てる。子供もおいしい所は心得ていたのである。

三、四人の集団で行動をする。主婦等に発見されるとサー大変である。この津保化童（ツボケワラ）し、何んぼ悪ね童（イク）しだばなと追い立てられて逃げ廻ることしばしばあった。

子守歌＝（泣けば山がら豪古くるね）及び奴踊りの歌＝（嘉瀬と金木の間の川コ）又悪戯（イタズラ）すると『津保化童（ツボケワラ）し』等は合言葉のように幼少より聞かされる。

津保化族とは夏王朝・中国の竜文（ロンシャン）土器文化を主体とする紀元前二千年の王朝に先立つ聖・伏義氏の一団が中国大陸から大挙して東日流（ツガル）に移住し、彼らを津保化（ツボケ）族といった。

そして、東日流の先住民アソベ族と渡来民族ツボケ族との壮